

第一言語習得初期における助詞ノの研究
——発話機能と使用の変化に着目して——

A Study of the Japanese Particle *No* at the Early Phase of First Language Acquisition:
Focusing on its Conversational Functions and Change in Use

富岡 史子
TOMIOKA, Fumiko

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第47号 2019年3月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.47 2019

第一言語習得初期における助詞ノの研究 —発話機能と使用の変化に着目して—

富岡史子

1. はじめに

初めて子どもが「マンマ」や「ブーブー」と言ったときのことを記憶している親はいるだろうが、「ネ」や「ノ」のような語をわが子がいつ使い始めたか記憶している親は少ないだろう。この「ネ」や「ノ」のような機能語と呼ばれる語の習得過程は、「マンマ」や「ブーブー」のような語の習得過程より、さらに見えにくいように思われる。一体、子どもはこのような機能語をどのように習得していくのだろうか。特に日本語のノのように格助詞・準体助詞・並立助詞・終助詞（『日本語文法大事典』1971）などに分類される使用域の広い語の習得過程はどうなっているのだろうか。

これまで子どものノの習得に関しては、助詞全体の習得の中での習得順序（大久保1967、白井・白井2016）や、格助詞ノの過剰生成（永野1960、柴谷2011、村杉2014）などが議論されてきたが、機能語としてのノの習得メカニズム解明に特化した研究は管見の限り見当たらない。

富岡（2015）では、子どもの発話データベース CHILDES に収録された日本語を母語とする5名の子どものデータを用い、ノの初出から半年間の発話の種類やその産出数の変化を、ノと共に起する語などを中心に観察し、居住地の異なる5名の子どもたちに以下の共通点があることを指摘した。

- ①ノの初出は、早い子どもと遅い子どもで15ヶ月ほどの差があるが、平均発話長（mean length of utterance, MLU）で見ると1.0から1.5の間に収まっている。
- ②ノの産出初期の形式は、下記の(1)のような「1語+ノ」である。
- ③産出初期には「名詞+ノ」がやや先行する傾向にあるが、数ヶ月のうちに「動詞／形容詞+ノ」が急増する。
- ④初期には感情的、評価的に否定的な意味を持つ語（ナイ、イヤ、チガウなど）がノと共に起しやすい。
- ⑤ノが使用される場面は、聞き手である大人の意図と齟齬のある場面であることが多い。

以上のことから、5人のノの習得過程に何らかの共通性があることが予測されたが、富岡（2015）では、その詳細の解明までには至らなかった。

(1) 乗ん(る) の。 [Ishii, 11126-601] ¹

¹ 括弧の中に左より順に CHILDES のコーパス名、ファイル名、ライン番号が示されている。さらに、この Ishii コーパスの場合、ファイル名は、対象児の月齢（日齢）を示しており、11126 は 1 歳 11 ヶ月 26 日に採録されたものであることを意味する。

そこで、本稿では、ノの産出過程を更に探るため、日本語母語話者1名のデータを詳細に分析した。具体的には、CHILDESのIshiiコーパスを用い、初出から半年間に焦点を当て、発話の機能とその使用の変化を調査した。そして、さらに、そのノの産出に関わる談話的側面からの要因として、Du Bois (2003) の対話統語論 (dialogic syntax) の枠組みを用い、響鳴 (resonance)²とノの産出との関係を探った。その結果、対象児のノは、「情報提供」「意思表示」「質問」「応答」などの機能を持つ発話と共に産出されていることがわかったが、産出数は月齢とともに変化し、「応答」「意思表示」が早く、その後「情報提供」が増加し、「質問」は最も少なかった。そして、その変化には響鳴 (resonance) が関わっている可能性が示唆された。

本稿の構成は、以下のとおりである。次節で先行研究を紹介し、3節で本稿の用いるノの分類について説明する。4節で、調査対象と調査方法、5節でその結果と考察、6節でまとめと今後の課題について述べる。なお、本稿では、研究対象の/no/を、カテゴリーとしては「ノ」、具体的発話例では「の」と表記する。

2. 先行研究

2.1 ノの習得順序に関する研究

これまで、ノの習得過程解明へのアプローチとしては、まず、習得順序の研究が挙げられる。

大久保 (1967) は、語の初出に重点を置き、幼児1名の言葉の習得を縦断的に調査した。その中で、ノは、言語習得初期に、終助詞、準体助詞、格助詞の順に産出が始まるとされている。

大久保 (1967) が1名の縦断的調査であるのに対し、小椋 (1998) は、米国で開発されたマッカーサー-乳幼児言語発達質問紙の日本語版の標準化を行い、それを用いて8ヶ月から3歳までの2000名以上の幼児の発話を横断的に調査し、幼児の平均的な言葉の発達を明らかにした。小椋の調査では、その言葉が使えると養育者から報告された子どもの数が50%を超えた月齢を発現時期としていて、少数の子どもを対象にした縦断的研究の初出報告時期よりも、全体的にやや遅い発現となっている。その中でノは、所有のノが早く、ついで終助詞ノが出現するとされている (白井・白井2016)。

これらは、母語習得の資料として非常に貴重なものであるが、なぜそのような習得順序になるのかを解明するためには、別角度からの研究が必要になる。

白井・白井 (2016) では、Shirai (2004) のデータを用い、母語としての子どもの日本語終助詞の習得には共通する3段階があることを指摘している。その3段階は認知発達と関わっていて、ノに関して言えば、ノは終助詞のネやヨと同じく使用場面が「イマ・ココ」に限定される第1段階に使用され始めるとしている。そして、白井・白井 (2016) はノと同じ第1段階に現れるネとヨを取り上げ、子どもの場合、その機能は大人とは異なり、コミュニケーション上の機能が一義的である

² 響鳴 (resonance) については、2.3で説明する。

と指摘する。これは、ネやヨにおいて、子どもの機能から大人の機能に変化する過程が存在することを示唆しており、ノの習得のメカニズムを探る上でも興味深い。

2.2 ノの過剰生成

ノの習得過程に特化した研究としては永野（1960）が挙げられる。永野（1960）では、幼児2名のノの習得の縦断調査から、ノは2歳前後の短い期間に、終助詞³、準体助詞、格助詞の順で獲得され、また、格助詞では正用が出現した後、「赤いノ車」のようなノの過剰生成と考えられる誤用が生じ、その後正用に至ることなどが報告されている。永野（1960）は、この現象を、準体助詞ノの習得が格助詞ノの習得より先行し、その準体助詞ノの類推から格助詞ノが習得されるためであると考察している。ノの過剰生成に関しては、横山（1990）、柴谷（2011）、村杉（2014）などが、それぞれの言語学的立場から論じており、ノの習得のメカニズムを明らかにするためには、考えなければならない現象であるが、3節で述べるように、本稿の調査対象から格助詞に相当するノが外れるため、今回はこれ以上立ち入らないこととする。

2.3 日本語文法研究における文末詞ノ

日本語の文法研究において、文末詞ノは様々な角度から議論されている。文末に現れるノは、終助詞あるいはノダを構成する準体助詞と考えられ、文末にあって多様な陳述的機能を果たしている（田野村1990、益岡1991、2007、野田1997他）。しかし、多くの研究によって文末詞ノ（ダ）の多種多様な用法・機能は明らかにされつつあるが、その基盤となるノ（ダ）の「本質」については、統一的な見解に収斂されているとはいいがたい（井島2010）。

その中で、これまでの理解の側面からの研究では日本語学習者が適切な産出に至らないことから、庵（2000）はノ（ダ）の産出の側面からの記述の必要性を指摘した。そのような流れにある研究として菊地（2000）、石黒（2003）、藤城（2011）などが挙げられる。

菊地（2000）は、「のだ」の本質は、①話し手と聞き手とが、ある知識・状況を共有し、②それに関連することで話し手・聞き手のうち一方だけが知っている付加的な情報が有るという場合に、その一方だけが知っている部分を提示するときの言い方が「のだ」であるとし、産出のための条件を示した。

石黒（2003）は、「のだ」の中核機能として「話し手、聞き手のいずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示す」ことを挙げ、発話時の条件に言及している。

藤城（2011）は、ノダの使用には、A「関心対象」、B「前提としての既定性」、C「認識のギャップ」という三つの要素が関わっていると考え、これらの要素と、多様な用法との関係を記述している。これらの研究は、本研究で明らかにされた第一言語における子どものノの産出過程で観察されたノの使用に関わる要素、機能的側面の記述に繋がる部分が多い。

³ 終助詞が1番早く産出されるとしているが特にそのデータは提示されていない。

以上の先行研究から、文末のノの「本質」を探るためにも、産出に視点を置き、どのような場面と結びついたノの使用が産出の初めから繰り返され、何が産出を動機付けていくのかという習得プロセスの解明は重要であると考ええる。

2.4 対話統語論と文法習得研究

文法の習得過程をどう研究するかは、研究者の言語観や言語習得観によって大きく異なる。文法を「談話内で繰り返し使用されることによって形成されていく創発的なものである」(Hopper2011)と考える用法基盤モデル (usage-based model) に基づく創発文法 (emergent grammar) の立場によれば、どのような使用形式が繰り返されるか、それらが文脈上どのような機能を持つかが、その習得過程を解明する上で鍵となる (Koymen and Kyratzis2014)。本研究は、このような立場から、ノの習得過程を明らかにするため、文脈上のノの機能と使用頻度の変化に着目した。そこで、以下に、本研究の枠組みとなるP.ホッパーやDu Bois (1985) の対話統語論 (dialogic syntax) とそこで指摘されている響鳴 (resonance) という現象について説明する。

P.ホッパー (2011:230) の創発的文法 (emergent grammar) は、文法を「談話内で観察される繰り返しの中のある種のカテゴリーにつけられた名称にすぎない」とし、「その形式は固定したテンプレートではなく、対面的な相互行為のなかから立ち現れるもの」であると考ええる。つまり、「伝統的形式主義や機能主義のように、文法と語彙は使用以前に抽象レベルに存在しており、記号、規則、単位を含んだ同一のシステムが全員に共有されていることでコミュニケーションが成り立つ」と考えるのではなく、文法は、話し手と聞き手による相互行為としての談話の中で、ダイナミックに構築されていくと考える (崎田・岡本、2014:88)。

この観点から提唱されている文法へのアプローチに、Du Bois (1985) の対話統語論 (dialogic syntax) がある。従来の統語論による研究では、記号間の構造上の関係を単一の文内で分析するが、対話統語論では、「文と文との間の構造上の関係に焦点を当てることで、話者によって産み出されたある構造と別の話者によって産み出された何らかの類似点を有する構造との間の写像 (mapping) 関係を見出す」ことになる (崎田・岡本、2014:92)。そして、そのためには、自然の言語データを綿密かつ客観的に観察し談話内に繰り返し生じるパターンを見出し、その産出を促す文脈上の要因を探ることが重要となる。この「繰り返し生じるパターン」を、談話統語論で、響鳴 (resonance) と呼んでいる。響鳴とは、言語事実に本来内在する潜在的な類似性 (intrinsic potential affinity) を活性化することである。

例えば、崎田・岡本 (2014:92) が、響鳴の例としてあげている次の短いやりとりを見てみよう。

(2) JOANNE: It's kind of like you Ken.

KEN: ... That's not at all like me Joanne.

従来の統語論ならば、この2文はそれぞれ独立した文として扱われ、それぞれの統語構造が分析対象となる。しかし、対話統語論では、(2)は(3)のように、2文の類似部分を縦に揃えて書き直した

ダイアグラフと呼ばれる形式で書き直され、言語要素間のマッピング関係を示す。

(3) JOANNE: it 's kind of like you Ken.

KEN: that 's .. not at all like me Joanne.

(3)を見ると、(2)でJOANNNEに続くKENはどのような言語形式を選ぶことも可能であったにも関わらず、JOANNNEの発話と様々な言語レベルで、似通った語や形式を選択し発話していることがよくわかる。例えば、語彙レベルでは、KENはJOANNEの使った「's」、「like」という同じ語彙を用い、意味レベルでは、itとthat、youとmeが同じ対象を指示している。機能レベルでは、文末にある「Ken」と「Joanne」はともに呼格機能を持つ。句レベルでは、kind ofとnot at allが同じ位置で入れ替わり、文レベルでは、双方がコンピュータ文であるという共通点をもつ。また、実際の会話では音声面での類似性もあるだろう。このように、あらゆる言語のレベルで、類似性を持つ文をKENは発話している。もし、先行してJOANNNEの発話がなかったら、KENはこのような文を産出したのだろうか。

このように、先行する言語材料を後続の発話で、繰り返し、変形、代入、言い換え等によって再利用する現象を、響鳴 (resonance) と呼び、KENの発話はJOANNNEの発話の響鳴 (resonance) によって産出されていると考える。つまり、響鳴 (resonance) とは、自分の頭の中に蓄えられた言語材料だけではなく、「イマ・ココ」の発話場面に現れた、先行する発話の中にある同じ形式や内容をうまく再利用し、様々な言語レベルの類似性を活性化しつつコミュニケーションを成立させていくことである。これらはまた、母語の習得過程にも大きく関わっていることが観察されている。

Koymen and Kyratzis (2014) は、英語母語話者である子どもたち7名 (月齢12ヶ月～34ヶ月) の補文構文の習得過程を、保育施設での子ども同士の会話を通し観察した。その結果、子どもが大人や自分の先行する発話の響鳴 (resonance) を通して補文構文を産出、習得していく過程が明らかになった。

堀内ふみ野 (2017) も、対話統語論 (Dialogic syntax) の枠組みを用い、英語母語幼児3名 (1歳～3歳半) の英語前置詞の習得過程を分析した。その結果、「子どもが前置詞やそれを含む構造を使えるようになる過程では、親の発話への響鳴 (resonance) ・親からの響鳴が重要な役割を担っている」こと、月齢にともなって響鳴の起きる頻度に変化があることを示した。

以上、対話統語論と響鳴、それらを枠組みとして用いた研究について説明した。

3. ノの分類

本研究では、子どもの産出したノを以下のように、ABCDに4分類する。これは、統語期前に子どもが「1語+ノ」という文法的手がかりが少ない形式でノを産出し (富岡2015)、内省報告も期待できないため、調査者によって観察できる、a.ノに前接する語の種類が用言か体言か、b.発話現場に指示対象があるかないか、という2点により4グループに分けたものである。多くの習得研

究では大人の品詞分類をそのまま用いているが、本研究では、目的が母語の習得過程の発話機能を探ることであるため、すでに機能的概念を含んでいる品詞分類を使用することは適切でないと考えた。なお、ここで言う指示機能とは、発話場面に実在する対象を特定する機能のことである。

- A. 用言後接（非指示）のノ
- B. 用言後接（指示）のノ
- C. 体言後接（指示）のノ
- D. 体言後接（非指示）のノ

AからDについて、以下に説明する。

「A.用言後接（非指示）のノ」は、動詞や形容詞に後接するノで、大人では文末用法のノに当たる。本研究の対象児の発話では(1)や(4)が用例として挙げられる。このノを含む発話に指示機能はなく、また、このノを取り除いても発話自体の意味に変化はない。

(4)タイヤこどもタイヤこわってん（壊れてる）の。[Ishii, 20524-111]

「B.用言後接（指示）のノ」は、(5)のように、動詞や形容詞に付き、代名詞的に振舞う。発話場面の中に指示対象が存在し、ノがないとその指示機能はなくなり、語句の意味も変化する。

(5)えっと おきい（大きい）の こえ（これ） 乗って。[Ishii, 20225-142]

「C.体言後接（指示）のノ」は、(6)のように、名詞に付いて「～のもの」という所有の意味を表す。発話場面の中に指示対象が存在し、ノがないとその指示機能はなくなる。

(6)パパの。 [Ishii, 20212-199]

「D.体言後接（非指示）のノ」は、(7)のように名詞に付き、名詞句の中で後続する名詞を限定する機能を持つ修飾用法のノである。このノと前接する語で作る名詞句に指示機能はない。また、このノがないと、後続の名詞との関係が不明瞭になることから、統語的機能が明らかなノである。

(7)ジュンの自動車。[Ishii, 20424-638]

上記ABCDは、『日本文法大事典』（1971、明治書院）のノの分類では、Aは終助詞、準体助詞（助動詞につづく）に、Bは準体助詞（もの、こと）、Cは準体助詞（～のもの）、Dは格助詞に該当する。

4. 研究対象と研究方法

4.1 研究対象の範囲

本研究では、3節でABCDの4グループに分類したノの中で、「A.用言後接（非指示）のノ」を研究対象として取り上げる。BCDのノはそれぞれの機能が明らかであり、Aとは別機能であると思われたからである。しかし、本研究の観察過程で、(8)の171「パパの」のように一見「C.体言後接（指示）のノ」であるノが、指示機能を果たしていないように見える用例が一定数見つかった。大人の文末用法では、名詞述語に付加されるノがあることから、この場合の「パパの」が、「パパなの。」から「な」が欠落したものであるということも考えられるが、内省を求めることができない子ども

もではこの時点で確認することができない。そのため、今回は研究対象から外した。しかし、子どものノの習得メカニズムを考える上で興味深い用例である。

(8) (JUNが撮影ビデオのモニターを見ているのを見て、父がモニターに映っている人について尋ねる)

170父「だれ、あれ？」

171子「パパの」

172父「パパ」 [Ishii, 20220-171]

4.2 データ

データとして、幼児の発話データベースであるCHILDES、TALK BANK (Mac Whinney 2000) のIshiiコーパスを使用した。Ishiiコーパスは、日本語母語話者男児JUNと父親の自宅での自然会話を、JUNの月齢6ヵ月から3歳8ヶ月までの期間、1か月2～5回の頻度で採録したものである。データは採録日別に100ファイルあり、全91572発話（その内子どもは44513発話）の書き起こしスクリプトがオンラインで公開されている。このデータを選んだのは、子どものノの初出がはっきりしており、ビデオによって子どもの発話状況が確認できるためである。

研究対象の「ノを含む発話」は、CHILDESの検索プログラムであるCLUNを用い、IshiiコーパスJUNの「ノ」のキーワード検索によって抽出した。抽出したすべてのJUNの「ノを含む発話」は3353例だった。その中で今回は、研究対象を初出（1歳11ヶ月）から2歳5ヶ月までの半年間に産出された528例に限り、それらを、3節で述べたABCDに目視で分類した。その結果「A用言後接（非指示）のノ」は369例あり、4.1で述べた理由により、これを分析対象とした。

JUNのノの種類別産出数の内訳を表1に、産出数の推移を図1に示す。表1からわかるように、「A用言後接（非指示）のノ」が最も多く、次いで「C.体言後接（指示）のノ」、統語的機能が色濃いBDは、この時期まだ多くはない。また、図1からわかるように、初めの2ヶ月はACが先行して出現しているが産出数は少ない。しかし、Aは3ヶ月目から増え始め、この半年以降も増加が予測される。BDの出現はノの初出から4ヶ月目以降になる。

表1 JUNのノの種類別産出数

月齢	A用言後接 (非指示)	B用言後接 (指示)	C体言後接 (指示)	D体言後接 (非指示)	総計
1:11	2				2
2:00	1		1		2
2:01	8		11		19
2:02	67	2	18	1	88
2:03	85	2	33	4	124
2:04	78	4	22	6	110
2:05	128	10	26	19	183
総計	369	18	111	30	528

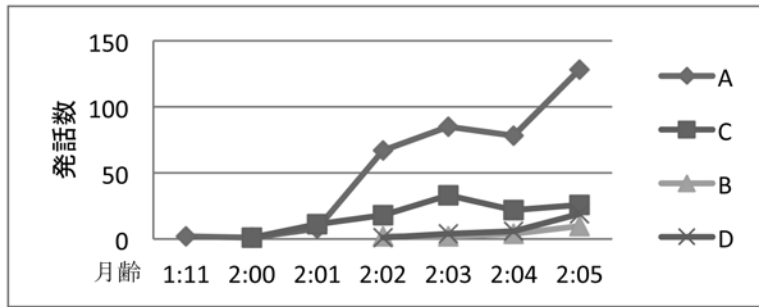


図1 JUNの「の」の種類別産出数の推移

4.3 調査方法

4.3.1 「の」を含む発話」の機能分類

まず、「A用言後接（非指示）の」を含む発話369例の発話の機能を1例ずつ自由記述し、共通するキーワードを整理し分類した。その結果、「A用言後接（非指示）の」を含む発話を、以下の4種類に分類する。それぞれの用例は5.2で示す。

- ①「情報提供」：話し手である子どもが、発話場面で、質問に答える形ではなく自ら、それまで発話場面になかった「情報」を加える「の」を含む発話（言語表現の訂正を行うことを含む）。
- ②「意思表示」：話し手である子どもが、自分の意思を、質問に答える形ではなく自ら表示する「の」を含む発話。
- ③「応答」：子どもが聞き手の質問に答える「の」を含む発話。
- ④「質問」：子どもが聞き手へ質問する「の」を含む発話。

以下では、①～④の「の」を含む発話」を、「情報提供」「意思表示」「応答」「質問」と表示する。なお、これらは「の」を含む発話」の機能であって、「の」の機能ではない。

4.3.2 分析

「A用言後接（非指示）の」を含む発話369例を上記の4種類に分類し、それぞれの産出の特徴を見る。観察ポイントは、月齢に伴う産出数の変化、「の」が産出された場面（生活場面、絵本場面、玩具場面）、その際のトピック共有の有無、会話相手との対立の有無である。

4.3.3 響鳴 (resonance) の調査

次に、「A用言後接（非指示）の」を含む発話369例が響鳴 (resonance) を通じて産出されたものであるかどうかを調査する。響鳴は、言語のあらゆるレベルで起こるとされ、また先行研究の Koymen and Kyratzis (2014) や堀内ふみ野 (2017) では、先行する20節を遡って響鳴の有無を調べるなど、様々な言語レベルや、響鳴の範囲の設定が可能であるが、本研究では最も単純な形の響鳴である、子どもの「の」を含む発話の直前直後の「繰り返し」について調べる。

5. 結果と考察

5.1 「ノを含む発話」の機能別産出数とその変化

子どもの「A用言後接（非指示）のノ」を含む発話369例の発話の機能（情報提供、意思表示、応答、質問）をコーディングした結果を示す。

まず、発話機能（情報提供、意思表示、応答、質問）のそれぞれの産出数を表2に示す。意味が取れなかった3例を除き、総数は366例である。その中で「情報提供」が最も多く、全体の約40%を占めている。次いで「応答」が37%、「意思表示」16%、「質問」が7%と最も少ない。

次に、発話機能別産出数の月齢に伴う変化を図2に示す。Ishiiコーパスでは、月齢ごとの採録時間が異なるため、図2は発話数を各月齢30分間の平均値にして示した。図2を見ると、「応答」「意思表示」が先行して産出されていることがわかる。しかし、2歳3ヶ月以降は「情報提供」の産出数の伸びが大きく、一方で、「意思表示」は2歳2ヶ月頃を境に減少する。

表2 発話機能別産出数

月齢	情報提供	意思表示	応答	質問	総計
1:11	1				2
2:00		1			1
2:01		3	3	2	8
2:02	11	25	24	7	67
2:03	26	18	36	4	84
2:04	39	4	31	4	78
2:05	67	9	42	8	126
総計	144	60	136	26	366
%	39.3%	16.3%	37.2%	7.1%	

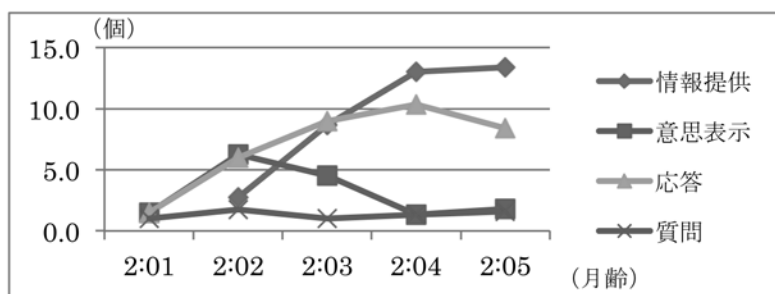


図2 機能種類別産出数の月齢に伴う変化

5.2 発話機能別の用例と特徴

4種類の発話機能の用例と特徴について以下に記す。

(9)の601子は、1歳11ヶ月に産出された「情報提供」の初例である。「情報提供」では、多くは指さしを伴った「これ」「ほれ」などの言葉によって、トピックとなる対象への視線や注意の共有が必ず先行して行われ、その後に、それまで発話場面になかった情報を子どもが会話に持ち込む。こ

こでの「情報」は、真偽を問えるような「情報」だけではなく、習得初期には、子どもが発話以前に既に知っている「言葉」という程度のもを、また、子どもがある程度文を作れるようになってからは、子どもの頭の中でのみ成立し、他者が真偽を問えない仮想的なものなども含んでいる。

視線の共有（共同注意）を成立させるのは、話し手である子ども自身の場合と、大人の場合があり、産出初期には大人である場合が多いが、次第に子ども自身がトピックを導入することが多くなる。子どもは自分が共同注意を成立させ、話の場に持ち込んだトピックのときにはターンの繰り返しが長くなる傾向がある。

(9) (電車の絵本を2人で見ている。子が絵本の絵を指さしながら聞く。)

595子「こえは？」

596父「電車」

597子「パパバヤ」

598父「パパか、それ。」

599子「ジュン×××」

600父「ジュンか」

601子「のんの」

604父「のんの」 [Ishii, 11126-601]

また、1つのトピックに関する会話の長さは、それが含む「情報提供」の数に比例して長くなる傾向がある。1歳11ヵ月では、絵本の電車の話題に関して交わされた会話は9ターンでその中に「情報提供」は1例だったが、2歳5ヶ月になると、同じ絵本場面でゾウの絵を見て交わされた会話は66ターンになっていた。そして、その中に「情報提供」のノが、5例含まれていた。子の「情報提供」のノを含む発話が、談話を活性化し発展させているようである。他の機能の発話では、この時期、一つのトピックに関してこれほど会話の長さが長くなることはない。

(10)の489子は、2歳0ヶ月に産出された「意思表示」の初例である。「意思表示」では、ノと共に起する語の語彙的意味は、意志や感情を表わすもので、対立場面など、聞き手と何らかの齟齬がある場面で多く使用されている。ノがなくても「意思表示」の目的は果たすことができるのだが、なぜかノを付加する。

(10) (部屋から出て行こうとするJUNに父が声をかける)

485父「どこいくの」

486子「あっち」

487父「ああ、あれもってきて」

489子「いやの」

490父「あれもってきて」

491子「いや」 [Ishii, 20017-489]

(11)の31子は、2歳1か月に産出された「応答」の初例である。28子の発話が先行していて、29父の質問はその発話の確認になっている。31子は、30父の発話の繰り返しのようだが、発話末のイントネーションは30父が上昇しているのに対し、31子は下降している。

(11) (自動車の絵本を見ながら)

28子「大きいみあん (みんな) 大きい」

29父「みんな大きい？」

30父「みんな大きいの？」

31子「大きいの」

32父「はいはい、×××」 [Ishii, 20108-31]

「応答」は、ノの産出初期に多い。また、初期には(12)の419父と420子のように質問-応答の隣接ペアがかみ合わない例も散見される。

(12) (2人で自動車の絵本を見ている)、

418父「わあ、たくさん自動車！」

419父「ジュンどれ乗る？」

420子「乗るの」

421父「どれ？」

422子「乗りたいの」

423父「乗りたいの」

424父「ふーん」

[Ishii, 20304-420, 422]

(12)の場合、子どもは「どれ」の意味がまだわからないのか、あるいは質問-応答という結びつきの理解が不十分なのかわからない。どちらにせよ子どもは、ここから1・2ヶ月で質問-応答の不自然な結びつきはなくなる。また、419父の発話はノのない質問文であり、必ずしも「～ノ？」に対して「～ノ」で答えているというわけではない。しかし、この時期、質問をされると「～ノ」で答えるというパターンが子どもの中である程度定着しているようでもある。

次に、(13)の170子は1歳11か月に産出された「質問」の初例である。(13)は、「質問」の用例としては1例だけ早い時期に産出され、次の産出までには1か月以上の間隔が空く。(14)は、2歳2か月の例である。「質問」は、この期間産出が少なく、「情報提供」が急激に産出数を増やしていくのとは対照的である。また、(13)のように「か」を伴うノはこの1例のみで、2歳4ヶ月以降に「ノカナ(ア)？」が9例産出されるが、「ノ？」は多くない。ノは質問のマーカーと説明されることもあるが、その機能はこの時期希薄である。

(13) (絵本を破くことについての話。「めー」は「だめ」の意)

169父「めーや」

170子「めーのか」

171父「めー」

172子「めーよう」 [Ishii, 11116-170]

(14) (おもちゃの車を押してブロックで作った道路を走らせようとしている)

214父「わっ！」

215子「おっき (大きい) の あかんの？」

346父「あかんの」 [Ishii, 20200-215]

子どもがノの産出を始める前に、子どもに向けられた父親のノを調べてみると、その95%が「～ノ？」など、子どもへの「質問」だった。もし、子どもの産出が周囲からのインプットの頻度のみで動機付けられるならば、最も多くインプットされる「質問」が最も多く産出されるはずである。しかし、子どもの初期のノの産出は、「情報提供」が最も多く、「質問」は7%にすぎない。この点からも、インプットの頻度によってのみノの産出が動機付けられているとは言えず、他の要因を探る必要がある。

以上、5.1では、ノを含む4種類の発話（情報提供、意思表示、応答、質問）について、その産出数と月齢に伴う変化を、5.2では、それぞれの発話の用例を示した。次節では、ノの産出の背景を探るため、使用される場面、トピック共有の有無、対立の有無などを調べた結果を示す。

5.3 ノの産出の背景

5.3.1 使用される場面

本節では、ノを含む4種類の発話（情報提供、意思表示、応答、質問）が、どのような条件で産出されやすいかを探るため、発話場면을絵本場面、玩具場面、生活場面の3場面に分け、産出の特徴を見た。ここで言う絵本場面は親子で絵本を見ている場面、玩具場面はおもちゃで親子が遊んでいる場面、それ以外の日常生活に関わる場面が生活場面である。

表3に場面別の発話機能の分布を示した。表3を見ると、ノを含む発話の総数は、玩具場面が最も多い。玩具場面では、親からの質問に答える「応答」より、子どもから発信する「情報提供」が月齢とともに増える傾向にあり、「質問」も後期には増えていく。絵本場面に比べて、子どもが能動的に「ノを含む発話」を使っているように思われる。

絵本場面では、子どもの「ノを含む発話」は、「応答」が半分近くを占めている。絵本場面では、教育的な意図からだろうか、他の場面より親の質問が多く、そのため子の「応答」が多くなっているのだろう。

生活場面では、「応答」が一番多いが、2歳1ヶ月、2歳2ヶ月に「意思表示」が非常に多く、その後減少する。「情報提供」は「意思表示」が減るころから出現し急増していく。

表3 場面別発話機能の分布

	情報提供	意思表示	応答	質問	合計
絵本場面	34 (33.0%)	14 (13.6%)	47 (45.6%)	8 (7.8%)	103
玩具場面	93 (49.5%)	22 (11.7%)	60 (31.9%)	13 (6.9%)	188
生活場面	17 (22.7%)	24 (32.0%)	29 (38.2%)	5 (6.7%)	75

以上のように「ノを含む発話」の機能は、場面により特徴がある。それは、場面により親のインプットにも特徴があり、それに対応するため機能が左右されて。

5.3.2 トピック共有の有無

ここでは、子どもの「ノを含む発話」の産出とトピックの共有との関係を調べた結果を示す。トピックが共有されているかどうかは、「ノを含む発話」に先行して、トピックが言語として表出されているか、指示語によって特定されているかによって判断した。5.2で述べたように「情報提供」の場合、「これ」「ほれ」などの言葉によって、主題となる対象への視線や注意の共有が必ず先行して行われていた。また、「応答」では、大人が質問するときに、子どもの注意を「これ、何？」などの質問を用いてトピックに向けさせている。「意思表示」においても、トピックは事態であることが多いが、その事態について何回かのやりとりがあった後に「ノを含む発話」が産出されている。本研究の期間においては「ノを含む発話」の97.3%が、産出に先行してトピックが共有されていた。トピックが共有されていない場合が5例あったが、これは「意思表示」のみで、子どもがいきなり親の意図と対立する意思表示を行うといった場面であった。

ノの習得初期の子どもは、ノの産出の際に、トピックの共有がノの使用の前提となっていると言える。

5.3.3 対立の有無

表4は、発話時に相手と意図の対立があったかどうかを調べた結果をまとめたものである。対立があったのは、全体的には28.1%で、「ノを含む発話」の産出には必ずしも相手との対立が伴うわけではなさそうである。

表4 対立の有無と発話機能

	情報提供	意思表示	応答	質問	全体
対立あり	25 (17.4%)	42 (70.0%)	33 (24.3%)	3 (11.5%)	103 (28.1%)
対立なし	119 (82.6%)	18 (30.0%)	103 (75.7%)	23 (88.5%)	263 (71.9%)
合計	144 (100%)	60 (100%)	136 (100%)	26 (100%)	366 (100%)

ただ、「意思表示」を見ると、70%に対立がある。また、他の産出にはあまり対立は認められないが、「応答」では否定的な答えの際にノが使用されている例が11例見られた。ノは「意思表示」では感情的な対立があるときに使用され、「情報提供」「応答」「質問」では感情的な対立はなく、情報のギャップを埋めることがその働きであるため、大人の場合は聞き手との間に認識のギャップのあることが前提となるだろう。ただ、この年齢の子どもが発達的にその認識が可能かどうかは疑問である。

以上、「ノを含む発話」の背景を見るために、発話場面、トピック共有の有無、聞き手との対立の有無を調べた結果を述べた。

対話統語論の観点からすれば、何故そこにノが産出されるかは、ノを含む発話のみを見ていてもわからない。そこで、「ノを含む発話」産出の要因として考えられる響鳴について調べた結果を次に示す。

5.6 「ノを含む発話」と響鳴 (resonance)

ここでは、ノの産出に響鳴 (resonance) が関わっているか、関わっているとしたりどのように関わっているかを調査した結果を示す。

響鳴を通じた産出の割合を響鳴率と言うが、「ノを含む発話」の総産出数の、期間全体を通しての響鳴率は63.1%であった。この数値は、英語前置詞の習得と響鳴の関係を示した堀内 (2017) の同時期と比較すると約10%高いものである。言語の違いや文法カテゴリーの違いはあるが、50%以上の高い割合で響鳴が起こっている点で共通している。

次に、響鳴が具体的にノを含む発話とどう関わっているかを見るために、調査期間の最終月齢である2歳5ヶ月の産出について調査した。その結果を表5に示す。表5は、発話機能別に響鳴の有無を調べ、「響鳴あり」の場合は、それが子の響鳴か、親の響鳴かも示した。その際、1つの発話で子の響鳴も親の響鳴も起こっている場合があり、響鳴ありの親と子の和は響鳴ありの合計数と一致していない。子が先行する発話を利用した場合を「子」、子のノを含む発話を親が利用した場合を「親」としており、響鳴率はそれぞれの発話総数に対する割合である。

表5 ノを含む発話の機能別響鳴の有無 (2歳5ヶ月)

	発話総数	響鳴なし	響鳴あり	響鳴率
情報提供	67	25	42 (子19、親23)	62.7% (子28.4%、親34.3%)
意思表示	9	6	3 (子2、親1)	33.3% (子22.2%、親11.1%)
応答	42	12	30 (子28、親14)	71.4% (子66.7%、親33.3%)
質問	8	5	3 (子1、親2)	37.5% (子12.5%、親25.0%)
合計	126	48	78 (子45、親40)	61.9% (子35.7%、親31.7%)

表5を見ると「情報提供」「応答」の響鳴率がそれぞれ62.7%、71.4%、と高い。特に「応答」は子の響鳴率が高い。一方、「意思表示」では、この月齢では「意思表示」の発話そのものが少なくなっているが、親の響鳴率は11%しかなく、親も子も響鳴率が低い。それに対して、「情報提供」や「応答」では親の繰り返しが3割を越えている。あることで、子の発話の「正の強化」となり、さらに発話を促進する可能性がある。

次に、響鳴がある場合、先行する発話のどの部分を再利用しているかを「応答」と「情報提供」の場合で調べた。例えば、先行する「Pノ」をそのまま繰り返す場合は発話全体を再利用する響鳴であるので、ここではこれを「全体」と呼ぶことにする。「Pノ」の後で「Qノ」を産出した場合はノを再利用したと考え「ノ」と呼ぶ。先行する発話にノがなく「P」だけの場合にPの部分を再

利用し「Pノ」を産出した場合は「ノ以外」とする。また、Pの一部を利用した場合も「ノ以外」に含める。「全体」「ノ」「ノ以外」の例を次に示す。(15)は子の「ノ」と親の「全体」を、(16)は子の「ノ以外」の例である。(15)の109子は、108父「そうすんの」の「の」のみ再利用している子の「ノ」の例である。また110父は109子全体を再利用しているので親の「全体」の例である。(16)の83子は、81父の「熱ないか？」うち、「熱ない」を再利用しているので子「ノ以外」の例である。

(15) (おもちゃの自動車で遊んでいる)

108父「そうすんの」

109子「タイヤがなおってんの」

110父「タイヤなおしてんの」 [Ishii, 20524-108]

(16)

81父「熱ないか？」

83子「熱ないの」

84父「さわってごらん」 [Ishii, 20524-82]

響鳴を通じて産出された発話の響鳴部分を、子と親それぞれで調査した結果を、表6と表7にまとめた。この表から、「応答」も「情報提供」も「全体」が多いことがわかる。「ノを含む発話」の前後で文全体を親子ともに繰り返しながら会話が進んでいると言える。例えば、「応答」では、子どもは親の「Pノ？」という質問に「Pノ」と全体を再利用して答える。また、否定の答えの場合「Pちがうの」のように「ちがう」という否定の言葉を加えた例が1例あった。絵本場面では「応答」が多かったが、その「応答」の中で大人の発話の全体を再利用する響鳴が活発に起こっている。また、「情報提供」では親の「全体」が非常に多く親の方が子の自主的に発した言葉を繰り返し、同じトピックを継続している様子が観察された。

「応答」でも「情報提供」でも、親にはノだけを再利用する例はなかったが、子どもはノだけを再利用、つまり「Pノ」と話された場合に「Qノ」と続ける場合が、「応答」で見られた。これは、この時期、親のノが子どもに発話を促すマーカーになっているということかもしれない。

表6 「応答」における響鳴 (数字は個数)

響鳴	全体	ノ	ノ以外	合計
子	19	7	2	28
親	8	0	6	14

表7 「情報提供」における響鳴 (数字は個数)

響鳴	全体	ノ	ノ以外	合計
子	14	0	5	19
親	16	0	7	23

ここまで、ノの初出から半年間のノの習得過程の詳細を見るために、日本語母語話者1名の「ノを含む発話」の機能を分類し、その使用の変化を見た結果を示した。また、その産出の背景を探るため、発話場面、トピック (視点) の共有、相手との対立の有無を見、談話的要因として響鳴との関わりを探った結果を示した。

5.4 考察

ノは言語習得初期から産出されるが、その中には機能がわかりやすいノとなぜそこに必要なのかわかりにくいノがあった。本研究では、機能がわかりにくいノである「A用言後接（非指示）のノ」を取り上げ、それがどのような発話で繰り返されていくのかを見た。

その結果、ノが付加された発話は「情報提供」「意思表示」「応答」「質問」の4種類で、これらの中で「応答」は、親の働きかけに導かれたものだが、その他は子どもの側からの自主的な会話への参加と言える。

産出数の増減から特徴を見ると、最初期によく出現するのは「応答」と「意思表示」である。富岡(2015)で印象的だった対立場面のノは、「意思表示」に見られたが、産出が多いのは一時的であった。むしろ、発話場面にトピック導入後、情報を追加していく「情報提供」が、月齢とともに増えていった。

それらの発話が出現するメカニズムを考えると、「応答」は親の働きかけが先行するものなので最初期に多いのは理解できる。Du Bois (2003) の対話統語論 (dialogic syntax) の枠組みを用いて考えると、「応答」では、意図的に親が子に「～ノ?」を多用していて、子どもの「～ノ」の産出が、先行する親の「～ノ?」の響鳴を通して促進されると考えることができる。しかし、「意思表示」では、自分の意図と対立があったり、何となく齟齬があったりする中で、自分の意思を表明しなければならない状況が作られているが、言語材料としては「応答」のように先行してノが与えられることは少なく、響鳴を通してノの産出が促されているとは言いがたい。1つの可能性としては、ノが使用される要因として、本稿の分類で「C.体言後接（指示）のノ」とされているノの(17)のような使用場面との類似性が考えられる。「C.体言後接（指示）のノ」の使用場面として、このような対立場面が対象児の場合繰り返し見られるので、子どもが「父の依頼→拒否→ノの付加」という記憶を蓄積し、「意思表示」の対立場面にもそれを適応するというようなことがあれば、ノの産出につながるかもしれない。今回の結果だけでは、推測の域を出ないが、一つの可能性として提示しておく。

(17) (おもちゃの自動車で遊んでいる)

170父「これ貸して」

171子「ブーやよー」

172子「ジュンのよー」

173子「あとで」 [Ishii, 20323-172]

この時期の親子の会話では親が子どもの発話を繰り返すことはよく見られるが、ノを含む発話に関しては「情報提供」にそれが顕著であった。子どもの能動的な会話への参加を、子の発話を親が再利用する響鳴によって「正の強化」を与えているように見えた。その他、トピックの共有は、この時期でもすでにノを含む発話産出の前提条件になっていた。一方、対立の有無はノを含む発話産

出の必要条件ではなさそうである。本研究で明らかになったのは、親が子へ働きかける発話にノがあるとき、子どもの響鳴を通じての発話が生じやすく、共有しているトピックへの子どもの情報提供にノがあるとき、親の響鳴を通じての発話が生じやすいということである。

白井・白井 (2016) では、習得初期の子どものネやヨのような終助詞に関して、大人の発話を促進するようなコミュニケーション上の機能が一義的であると指摘している。一方、本研究のノに関しては、確かに大人の発話を促進していたが、促進するのは共有するトピックに関しての情報のやりとりに関係する発話という偏りがあり、また、子の発話も親の「ノを含む発話」の響鳴を通じて促進されていて、単に大人の発話を促進する機能だけではなさそうである。

6. まとめと今後の課題

本研究では、富岡 (2015) を踏まえ、第一言語における文末詞的なノの習得過程を更に明らかにするために、CHILDESのIshiiコーパスを用い、ノの初出から半年 (1歳11ヶ月から2歳5ヶ月) に焦点を当て、子ども1名の「ノを含む発話」がどのような場面で使われ、どのような機能の発話とともに使用されているか、またその機能別の産出数が成長とともにどのように変化していくかを調べた。さらに、その背景やノの産出にかかわる談話的な要因として、Du Bois (2003) の対話統語論 (dialogic syntax) で指摘されている響鳴 (resonance) との関わりを調査した。

その結果、対象児のノは、「情報提供」「意思表示」「質問」「応答」の機能を持つ発話と共に観察され、その中で、「応答」「意思表示」の機能を持つ発話が早く出現し、次に「情報提供」次いで「質問」へと進んでいくことが明らかになった。富岡 (2015) で印象的だった対立場面のノの使用が多いのは一時的で、トピック導入後に新しい「情報」を発話場面に追加していく「情報提供」に付加されたノの使用が、親にも響鳴を通して奨励され、増えていく様子が明らかになった。そのためノの機能としては、単に発話末にあって大人の発話を促進するというだけではなく、共有されたトピックに関する情報のやりとりを促進していると考えられる。

今後、本研究の結果が一般化できるかどうかを他の子どものデータで検証することが先ず必要である。また、当該児の本調査以降の期間におけるノの産出の調査、響鳴との関わりについて会話内での範囲を広げての調査などが必要である。

参考文献

- 庵功雄 (2000) 「教育文法に関する覚え書き－「スコープの「のだ」」を例として－」一橋大学留学生センター 3、33-41
- 庵功雄 (2013) 「「のだ」の教え方に関する一試案」言語文化、50：3-14
- 石黒圭 (2003) 「「のだ」の中核的機能と派生的機能」一橋大学留学生センター紀要6、3-26
- 井島正博 (2010) 「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』第6号75-117

- 岩立志津夫・小椋たみ子 (2008) 『よくわかる言語発達』 ミネルヴァ書房
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』 東京堂書店
- 菊地康人 (2000) 「「のだ (んです)」の本質」 東京大学留学生センター紀要第10号
- 柴谷方良 (2011) 「理論研究と習得研究をつなぐ—準体助詞「の」の誤用「赤いのくつ」をめぐる—」
Abstract for Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ 7)
pp.22-29
- 崎田智子・岡本雅史 (2010) 『言語運用のダイナミズム - 認知語用論のアプローチ - 』 (山梨正明 (編)
講座 認知言語学のフロンティア) 研究社
- 白井純子・白井英俊 (2016) 「幼児の用いる終助詞—終助詞の習得順序と幼児の用いる終助詞「ね」「よ」
の機能について—」 『日本語学』 10月号、pp.46-57 明治書院
- 田野村忠温 (1990、再刊2002) 『現代日本語の文法 I : 「のだ」の意味と用法』 和泉書院
- 富岡史子 (2015) 「第一言語話者における「の」の習得—ノダ習得との関連から—」 『電子情報通信学会技術研
究報告』 Vol.143, No. 440, 143-148
- 永野賢 (1960) 「幼児の言語発達—とくに助詞「の」の習得過程について—」 『島田教授古稀記念国文学論集』
pp.405-418 関西大学国文学会
- 野田春美 (1993) 「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐる」 『日本語学』 12-11、pp.43-50
- 野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』 くろしお出版
- 村杉恵子 (2014) 「生成文法理論に基づく第一言語獲得研究」 『国語研プロジェクトレビュー』 Vol. 4
No. 3, pp. 1-42
- 藤城浩子 (2010) 「ノダの提示方法に関する一案：メタファーを用いた意味・機能提示」 日本語・日本語教
育研究 [1]
- 藤城浩子 (2011a) 「文末のノダにおける「既定性」と「承前性」」 早稲田日本語研究 (20) 70-81
- 藤城浩子 (2011b) 「現場教師の視点から常識を疑ってみる—「～んですから」を例に—」 庵功雄、森篤嗣 (編)
『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ書房
- 堀内ふみ野 (2017) 「響鳴からみる子供の前置詞の使用—CHILDESを用いた観察から—」 『日本認知言語学
会論文集 第17巻』 pp.339-351 日本認知言語学会
- 堀内ふみ野 (2018) 「対話から文法へ—overの習得を支える多層的な文脈—」 『第19回日本認知言語学会全
国大会予稿集』 pp.169-172 日本認知言語学会
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版
- 松村明 (編) (1971) 『日本文法大事典』 明治書院
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における「ノ」の誤用」 『発達心理学研究』 第1巻第1号 pp.2-9
- Ishii, T. (2004) Japanese-Ishii Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank. 1-59642-054-5.
- Du Bois, J.W. (2003) Discourse and Grammar. In Tomasello, M. (ed.) *THE NEW PSYCHOLOGY OF*

LANGUAGE vol.2 : *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, pp.47-87

Hopper, P. (1998) Emergent Grammar. In Tomasello, M. (ed.) *THE NEW PSYCHOLOGY OF*

LANGUAGE vol.1 : *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, pp.155-175

Koymen, B. and Kyratzis, A. (2014) Dialogic syntax and complement constructions in toddlers' peer interactions, *Cognitive Linguistics* 25 (3): 497-521

Mac Whinney, Brian (監修) 宮田Susanne (編) (2004) 『今日から使える発話データベース CHILDES入門』
ひつじ書房

